

俳句のコミュニケーション・メディアとしての可能性について

鈴木 雅実

ATR メディア情報科学研究所

キーワード：俳句，コミュニケーション，マルチメディア，共感

概要

俳句は世界最短の詩的文芸と言われ、五七五の定型や季語の存在、切れ字に代表される表現技法等の特徴が指摘されている。そのような従来の俳句観も、現在では国際化・グローバル化の急速な進展により、ある瞬間の感性を共有するコミュニケーション・メディアとしての側面が強くなりつつあるように思われる。このような視点に立って、俳句における「ことばの扱い方（扱われ方）」に関する、メディア情報科学的なアプローチについて紹介する。

俳句を巡る状況

俳諧の連歌に始まり、発句が独立したものとされる俳句は、松尾芭蕉による芸術としての一つの完成を見て以降、なおも数多くの俳人を輩出している息の長い文芸である。明治期の近代俳句の確立（正岡子規、高浜虚子ほか）以来、その裾野は大きく広がり、20世紀後半からは世界の様々な地域で各言語による創作活動が盛んになっている。また、最近の学校教育（初等・中等教育）では、国語科で俳句を題材とした授業が行なわれることが多くなっており、米国等の諸外国でも Haiku（ハイク*）が教育に取り入れられることも珍しくない状況である。

このような状況に至った理由として、幾つかの要因が挙げられる。俳句自体が持つ内在的な特性としては、従来から、その簡潔性、有季・定型（五七五の韻律的な要素も含む）、切れ字等に代表される時間的空間的な余韻の美学、等々が指摘されており、芸術性のレベルはともかく実践が比較的容易である。また、これらと関連するが、短さの故に、対象を説明するというよりは、イメージを喚起するに足る最小限のことばを呈示するものであり、未完結または省略の文学といった言い方をされる [1]。さらに、注目に値するのは、作者（詠み手）と鑑賞者（読み手）の関係が極めて接近している点である。句会等では、自己と他者の作品が無記名の状態で合わせて批評の対象となり、一種のディベートの様相も見られるということである。また、このようなコミュニケーションを通じて、（作者も予想しなかったような）意外な読みが発見され、それが共感し得るものとなる場合もある [2]。

一方、俳句を取り巻く状況としては、上述したグローバル化に拍車をかける要因として、情報通信技術の急速な進展がある。ネット句会のようなオンラインの俳句コミュニティや、季語や句例データを検索する等のソフト的なサービスも登場している。また、マルチメディア化の傾向も顕著となっており、伝統的にも存在していた「俳画」がデジタル化され、視覚以外の多感覚をも統合した「マルチメディア俳句」（本研究ではこの表記を用いる）が、様々に創作・編集・流通されるような時代となっている。さらに、グローバル化に伴う異文化との接触により、俳句自体も変容を遂げつつあると言って過言ではない。例えば、英語のハイクでは、“Haiku Moment”という概念が大きな意味を持つ。そこには新たなコミュニケーションの可能性が秘められている。

研究の位置付け

俳句に対する文学的な研究以外の科学的な研究事例はそう多くはない。というよりは極めて少ないと言える。その中でも、皆川直凡による認知心理学的な研究では、俳句の持つ二重性（対象の持つ意味的な関係と、深層的な心情との差）に着目し、主観的な印象評価を行なう心理実験を通して、その特徴の分析を試みている（[3]など）。また、俳句のテキストデータを対象に、ことばとして読み込まれた「音」に関する事象を分析して、各時代ごとの音環境（サウンドスケープ）を図示するような事例も見られる [4]。このほか、一種の「遊び」的な俳句の自動生成に関する試行も以前から行なわれ、そこに関係論的な認識の問題が見出されることもある [5]。

* 外国等の日本語以外の俳句を指す場合、ハイクと表記されることが多い（比較文学ほか）。

本研究では、メディア情報科学的な研究の立場から、俳句を通じて体験される「共感」の構造について探求するとともに、そのような共感を通じた「体験共有コミュニケーション」を支援するための、情報メディア的な提案を行なうことを目的としている。前者は、コミュニケーション行為の持つ目的指向の意思伝達の側面だけではなく、感性・情動的な側面にも焦点を当てることを意図している。後者は、応用分野としての教育と異文化コミュニケーションの促進に役立つ、情報メディアの設計と実装をねらいとするものである [6]。

俳句のことばの特徴とその分析

以上のような文脈において、俳句における「ことばの扱われ方」について一考を試みる。まず、俳句には日常的に一般に用いられない語彙もしばしば現れる。定型に合わせるための言い換えやいわゆる詩語もあるが、造語的な表現も見られる。また、短い句構成のために、ある語（例えば季語）から必然的に連想されることばは普通は盛り込まない、感情を直接述べることばは避ける、等の傾向がある。意味的な理解が可能な範囲で、やや意外なことばの取り合わせもよいとされる。もちろん、意味関係の曖昧性・多義性から、深い心情的な表現性が生まれる場合もある。

俳句には、一種のことば遊び的な側面があり、それが学校教育等に導入される一要素となっている。同類の音の重複や、ひらがな・カタカナ・漢字の使い分けによる、視覚的な効果も考慮される。しかし、この種の表現内容を別の言語に翻訳することは、非常に困難で不可能な場合も多い。これに関連して、ことばそのものをモチーフとした俳句は、表現する主題をモチーフとした俳句と比較して、「翻訳フィルター」を介した場合に、その脆弱さを露呈するという議論もある [7]。これは芸術論に関わる問題であるが、興味深い示唆を含んでいる。

さて、異文化・異言語間での俳句を通じた交流を支える一つの方法が、マルチメディア的な表現手段であることは明らかである。マルチメディア表現を仲介することによって、ことばとイメージの関係を共有することが容易となり、特に異なる自然・社会環境で育った個人間での相互理解には適している。ただし、ことばの持つイメージの広がり限定してしまうマイナス要因にも配慮する必要がある。さらに、絵画と俳句を組み合わせた（マルチメディア）俳画作品に対する印象評価を行なうと、絵画の印象を俳句のことばがどのように強めるか（あるいはその逆）等について興味深い知見が得られる可能性がある。筆者らの予備実験では、俳句によって叙述される内容が、絵だけから見るととれるものとほぼ同等な場合には、両者を複合することにより、印象はそれほど変化しないこと等が示唆された [8]。

どのようなことば、あるいは語法が人間の感性や共感にどのような影響を及ぼすかについて、マルチメディア表現との組合せや言語間の翻訳を通じた対比的な分析を行なうことにより、明確になることが期待される。本研究では、このような特性をふまえた上で、マルチメディア俳句を楽しみながら創作・鑑賞できるような情報メディアの提供を目指している [6][8]。

なお、本研究は、TAO の研究委託「超高速知能ネットワーク社会に向けた新しいインタラクション・メディアの研究開発」の一環として実施している。関係各位の支援と助言に感謝する。

参考文献

- [1] 外山滋比古: “省略の文学”, 中央公論社, 1976. (中公文庫, 1979.)
- [2] 坪内稔典: “坪内稔典の俳句の授業”, 黎明書房, 1999.
- [3] 皆川直凡: “認知心理学の研究対象としての俳句について”, 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編), 第16巻, pp.25-32, 2001.
- [4] 永幡幸司, 岩宮眞一郎: “俳句に詠み込まれた音とその音が聞かれた状況の関係の時代変遷”, 『サウンドスケープ』(日本サウンドスケープ協会誌) 第1巻, pp.73-78, 1999.
- [5] 黒崎政男: “哲学者クロサキの憂鬱 となりのアンドロイド”, NHK 出版, 1998.
- [6] 鈴木雅実, 片桐恭弘, 萩田紀博: “コミュニケーション・メディアとしての俳句を通じた共感形成に関する一検討”, 情報処理学会研究報告, CH56-1, pp.1-7, 2002.
- [7] 白峰義風: “世界の HAIKU 翻訳することでわかる俳句の真価”, 碧天舎, 2002.
- [8] 鈴木雅実, 他: “マルチメディア俳句による共感度の増幅効果について - 印象評価実験に基づく予備検討 - ”, 信学技報 TL-NLC (発表予定), 2003.